PJ-2-37

認知症治療病棟入院高齢者の作業適応に関する心理的プロセスと影響要因
―複線径路等至性アプローチ(TEA)を用いた単一事例研究―
Psychological Processes of Occupational Adaptation in Hospitalized Older Adults with Dementia
―A Single Case Study―

○中岡啓志 (OT)[1)]，久野真矢 (OT)[2)]
[1)]医療法人社団 せがわ会 千代田病院リハビリテーション科，[2)]県立広島大学大学院保健福祉学部保健福祉学科作業療法学コース

Key words: 認知症高齢者，人間作業モデル，複線径路等至性アプローチ

【序論】
認知症高齢者の作業適応は生活リズムや役割，価値，興味の再構築と密接に関連し，環境変化や認知機能低下の影響を受けやすい．特に入院による環境変化は作業参加を阻害する要因となる．しかし，認知症治療病棟入院後の高齢者の作業適応プロセスや影響要因は不明確である．
【目的】
本研究は，認知症治療病棟入院患者への作業療法介入を通して，作業適応プロセスと影響要因を複線径路等至性アプローチ(TEA)を用いて探索することを目的とした．本研究は質的研究でありCOREQ声明に準拠した．
【方法】
脳血管性認知症の70代男性A氏(Mini Mental State Examination 18点，Clinical Dementia Rating 1)に対して，半構造化インタビュー6回，トランスビュー3回，介入記録，興味・関心チェックシート，作業機能障害の種類に関するスクリーニングツール (STOD)，人間作業モデルスクリーニングツール (MOHOST)，作業に関する自己評価・改訂第2版 (OSA)，認知症高齢者の健康関連QOL評価表短縮版 (short QOL-D)の情報を収集した．【等至点：作業適応に近づく状態になる（以下，EFP）】【両極化した等至点：作業適応が困難な状態になる】として，TEAによりメンバーチェッキングを行い分析した．書面にて所属長の承認と本人・家族の同意を得て実施した．
【結果】
第１期， A氏は入院した(必須通過点（以下，OPP）-1)当初，混乱を示したが，家族面会や規則正しい食事により安心感を得た(社会的助勢（以下，SG）).しかし，「満足できる日課がない」という課題が顕在化した(OPP-2)．作業活動参加(分岐点（以下，BFP）-1)は継続困難だったが，「長年の習慣だった」(SG)と家族が日記を持参(BFP-2)し，週3回の日記を合意目標(OPP-3)とした．第2期，読書と日記により生活パターンが形成されたが，院内COVID-19発生(BFP-3)により活動・面会制限(社会的方向づけ（以下，SG）)が生じた．活動は担当作業療法士(以下，OT)との信頼関係(SG)を基盤に継続され，COVID-19収束後(BFP-4)，興味に基づき参加する活動を検討する(BFP-5)変化がみられた．第3期，「読書家」としての作業同一性を認識(SG)し，「死ぬまで動ける体でいたい」と内的動機づけが変化し，読書と日記が安定した習慣(OPP-5)となった結果，STOD(68→55/84点)，MOHOST(59→77/96点)，OSA(116→147/232点)，short QOL-D(26→30/36点)と向上(SG)し，「リズムのいい生活ができている」と【作業適応に近づく状態(EFP)】となった．
【考察】
入院による急激な環境変化は，A氏に作業剥奪や疎外を生じさせ，役割喪失感や満足できる日課の欠如という課題を顕在化させた．一方で，長年の習慣であった読書や日記，家族との関係性を基盤にした作業を用いた合意形成は，作業参加を再構築する重要な契機となり，アイデンティティの醸成と家族関係維持に機能した．COVID-19による活動制限下においても，OTとの信頼関係を基盤に作業が継続されたことは，作業パターンの維持に寄与したと考えられる．さらに，興味に基づく主体的選択の萌芽と「読書家」としての作業同一性の確立，家族役割の再認識が社会的助勢として機能し，個別性を尊重した環境調整と相互に関連した結果，安定した作業習慣が形成された．これらのプロセスを通じて，作業機能やQOLの向上がみられ，A氏は作業適応状態に近づいた．